

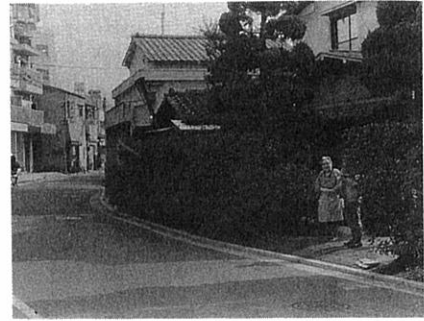
源左衛門橋付近



滝の観音分岐の道標



道標と延命地藏



高須一里塚跡の旧国道

3 己斐から五日市まで

太田川放水路の建設によって己斐川にかかっていた己斐橋は現在はコンクリート橋に変わっているが、「行程記」によると四〇間の土橋が架かっていた。西国街道は西に約六〇メートル進み、直角に南西に折れて進む。旧国道二号線として改修されて、現在は西広島駅前市街地の一部となっている。西に移動されているが、西国街道より「滝の観音」への分岐を示す道標（明治二年建設）がある。

西国街道は旧国道二号線として拡幅されて西に進み「源左衛門橋」で八幡川を渡る。この川には「行程記」によると長さ一間の石橋がかかっていたとあるが、現在は長さ八・二三メートル、幅六・八七メートルのコンクリート橋に変わっている。橋を渡って六〇メートル西に進むと「別の茶屋」とよばれる地名が残っている。名残を示すものとして「藤の木」がある。

北方一〇〇メートルの旭山には神功皇后を祀る己斐旭山神社がある。鯉を献上したことより己斐の地名となったといわれる。

山陽本線を渡って進むと水準点二・八メートル（明治二十三年の設置）が見られる。このあたりは「瀬切石」の地名で呼ばれており、海に面していたことが推定できる（「芸藩通志」）。

西国街道は山麓線に沿って西に進み、国道二号バイパスの下を通り、高須一里塚跡に達する。地籍図には「一里塚新開」の地名がみられるが、それは高須一丁目清水氏邸付近ではないかと推定される。文政二年（一八一九）の庄屋三兵衛による古田村古地図には「松の図」と「塚松」の説明がある。さらに一〇〇メートル西に進むと、浄土宗福蔵寺への入口を示す分岐点の「道標」と「延命地藏」がある。道標には「是ヨリちそう道」の文字がみられ「延命地藏」の「嘉永五年壬子秋七月 願主」の文字から建設年代がわかる。

高須二丁目から古江東町に入ると「行程記」に記載されている「新宮



草津の家並(小泉家)



草津大釣井



鷲森神社

神社」が西国街道の北に位置する丘の上にある。この神社には「古江最後の街道松」の輪切りが保存されていたが、平成二年の火事で焼失した。「古江最後の街道松」は古江西町二一・二五にあった。三〇メートル西に進むと道の南側に「道路改修碑」(明治四十三年四月建立)がある。古田一石内一伴―久地―加計を結ぶ起点であったことが伺える。

草津に入ると山陽本線と再び交叉する。道路の北側草津東三丁目に鷲森神社・弁天社がある。「行程記」には「弁才天」として鳥居の記載がある。山陽本線(旧山陽鉄道)敷設に伴い現在地へ移転したものと思われる。この場所に「高札場」が存在したことが『芸藩通志』によってうかがえる。

草津町の町並に入り、少し進むと南側に元禄十四年(一七〇二)に建立した日蓮宗慈光寺がある。北側山腹にある禅宗海蔵寺の末寺であったといわれる。草津は港町であるとともに、広島と廿日市の中間地点として「間宿」の役割を果たしていた。その名残りを残す古い家並みが見られる。「都志見往来日記」の草津図に当時の面影をみる事ができる。現在当時の名残りを残す家屋としては小泉家・小川家・山口家などがあげられる。

御幸川にかかるコンクリート橋(「行程記」土橋一間とある)を渡ると草津本町の町並みが続く。西国街道の西側に幸福稻荷神社があり、弘化四年(一八四七)・文政六年(一八三三)の銘をもつ石灯籠がある。北側には「行程記」に名がみられる永祿四年(一五六〇)に建てられた浄土真宗西楽寺の伽藍がみられる。さらに西に進むと安政六年(一八五九)に建てられた胡神社、西国街道の通行者も使用したといわれる草津大釣井(現在は使用されていない)がある。

「行程記」によると草津の家並みの中央部から二つに分かれる。本道は城山とウサギ山との間を通り山側の「長崎峠」を通る抜道であり、もう一つは「海辺近道」としてウサギ山の南を通る脇道がある。両者は草津と井口との境界、現在の国道二号線バイパスから西区商工センターへ



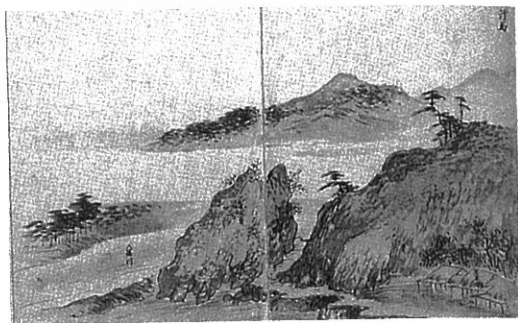
首なし地蔵



龍神山への登り口



小己斐明神

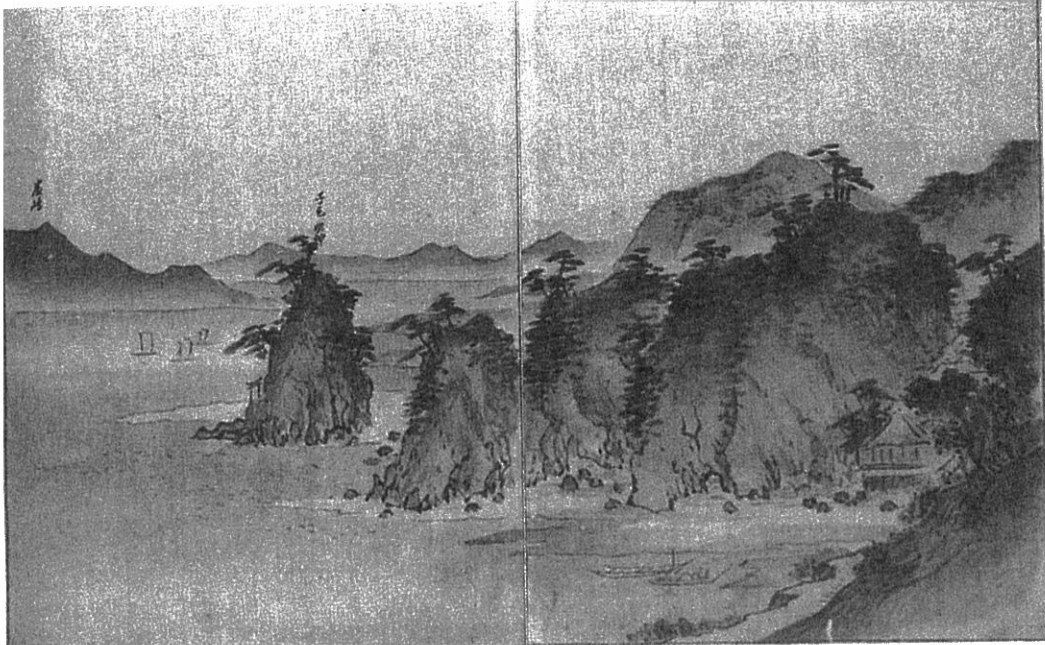


汗馬(都志見往来諸勝図・広島市立中央図書館蔵)

下る陸橋の下で合流している。本道の抜道は城山とウサギ山との間を峠で越していたが、現在は山陽本線・広電宮島線で山を削り下げられたり住宅地として地形が改変されているため「長崎峠」をはじめ往還道の一部を除き追跡することが困難である。小泉家には福島時代、広島城の西の守であった大門の金具(ちようつがいの部分)といわれるものが残っている。「大門」という地名とともに表街道であったことを伺わせる。

「海辺近道」は明治時代に国道として改修され現在に至っているが、山陽鉄道の線路によって海側に押し出された部分もあると思われる。広島電鉄の踏切の南側に文政年間から続いている「大石餅」の店がある。餅店の側に大石があったことよりこの名が起った。

「海辺近道」は沖合の埋立によって今は内陸の道となっているが、山陽本線を再び交叉し前述の陸橋下に至る。陸橋下から西に海岸沿いに進むと井口二丁目の「浄土真宗正順寺」に行きあたる。寛永十一年(一六三四)からこの地であり、「行程記」にも記載がある。この前の小川にかかったコンクリート橋(「行程記」では土橋九尺)を渡ると、現在は谷底沿いに直線の道路が造られているが、西国街道は高さ五八・五メートルの龍神山へ登る。登り口に「地藏」(舟型光背に地藏の顔形を彫ってある)がある。道は約六尺の幅の道らしきもの(石垣もみられる)を追跡できる。北側から登って行き、高さ四〇メートル付近から山腹を半周して五〇メートル付近に達し、山地の頂上付近を通り井口三丁目に下る。頂上付近からは広島湾が展望できる。この道は明治二十七年測図の二万分の一地形図に小道として見ることができる。現在は井口小学校の校庭、井口鈴ヶ台団地へと変わって、むかしの面影はない。昭和四十三年に入居が始まった井口鈴ヶ台団地の造成によって正順寺横から鈴ヶ峯高校への谷底沿いに広い道が出来たため使用されなくなっている。箱根に比べると小規模であるが「おいはぎ」のである難所であった。井口二丁目一三の井口小学校内に「首なし地藏」がある。これは現在地より五〇メートル西の西国街道



井口(都志見往来諸勝図・広島市立中央図書館蔵)

の南側にあった(「ふるさと井口の歴史」。これより西に行つたところに「一里塚」があつたと推定されるが、区画整理のため位置の推定ができない。現在公園がある南側付近と思われる。「行程記」には「周防尾瀬川境ヨリ七里、広島札場ヨリ二里前後六丁道」とある。幕末には武士を襲う盗賊が出没していたという。

「行程記」には、干潮時に正順寺から海岸沿いに阿瀬波(あせば)(汗馬)に行く道が記されている。旧国道はこの海岸を埋立てて明治六年に完成している。国道二号線の海側に記念碑があつたが、現在は井口高校西側に移されている。海中の小島に「小己斐明神」があつた(「都志見往来日記」にも書かれている。今では広島市西部開発事業による埋立てによつて西部埋立第二公園の中島(井口港の名残り)として保存されている。

山地から屈曲して下りた西国街道には、海岸の道と交つた地点の南側に街道松が昭和六十年頃まで一本残つていた。

西に三〇〇メートル進むと、阿瀬波川を暗渠(「行程記」では土橋九尺)で越える。西国街道は胡山の岩尾根が海岸に突出し、「行程記」に「切通し」と書かれたところに達する。胡山には「行程記」にも「荒神」と書かれた小祠堂がある。御神体は花崗岩の自然石で、現在地より二メートル海側にあつた。この位置と津久根島を結んだ直線が井口と五日市の境界線であつた。「がきの首」とよばれた切り通しも今は海側が田崎家によって除去され、山側岩肌が約一〇メートルの崖となつて見えるだけである。

「都志見往来日記」にも切通しの様子がみられる。「がきの首」の東側の山麓に地蔵があるが、この付近に茶屋があつた。

西国街道はこの「がきの首」から約二〇〇メートルほど八幡川左岸を北上し、八幡川を土橋で渡つて右岸を約二二〇メートル下り、旧海岸線の先端付近を南西に進む。さらに、標高三八メートルの岡の麓をかすめて西に直線の道となつて進む。この街道は十七世紀に海老浜に新開ができてから使用されるようになり、通称「松原道」と呼ばれていた。「行程



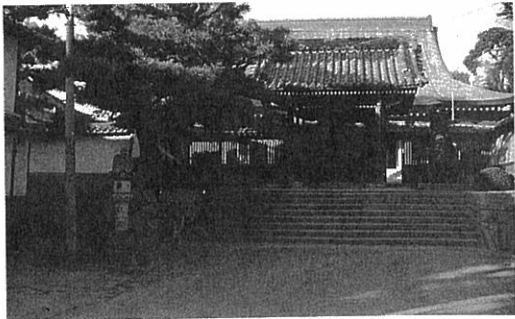
楽々園の街道松と水路



胡山にある荒神(田崎氏宅)



旧御筋橋の擬宝珠



光禅寺

「記」には「此海入口新道は五日市町筋古道なりしに、此所開作出來直道となる」とある。以前は現在の五日市の町筋の通りであった。ここは浄土真宗「光禅寺」「光禅寺誓いの松」「五つ神社」などの旧蹟がある。「光禅寺」は第二次長州の役のとき井伊掃部頭の本陣となったところである。「松原道」は西に直線状に走って「三筋川」に突き当たる。「行程記」によると三筋川から水路が山側沿いに東進し、現在の陸橋付近で西国街道と交叉し、海側を東進し海老山の西側に通じていた。現在でも陸橋の西部の水路は排水路として残っている。この道は山陽本線の敷設によって水路と交叉していた付近で踏切として改修されていたが、現在は陸橋によって立体交叉し、道は切断されている。

陸橋より西には旧五日市町指定文化財に指定された五本の街道松があったが一本枯死し四本が残っている。楽々園一丁目(伊田氏宅)の松は幹周三・一五メートル、高さ八メートルと最大であり、あとの松は一・五から二メートルの幹周をもつ。西国街道の面影を残すものといつてよからう。

三筋川には「行程記」によると、土橋二四間と長い橋が架り、右岸を南に下る道があったが、現在は橋のあった北岸に花崗岩製の擬宝珠(御筋橋と橋名があるが一つ残り、また明治十八年に建てられた里程標がある(里程標は四十メートル東の道端にあった)。

西国街道は三筋川の右岸を南に下る。ここは、周囲の水田面より一・八〇メートルほど高く、砂州であった可能性がある。約三〇〇メートル進むと、ほぼ直角に曲って旧海岸堤防上を直線で西に進み、国道二号線と交叉し、廿日市に入り、玖波から大竹方面へと続く。

注 「小己斐明神」は「子乞明神」とも「国印の明神」とも言われ、祭神がイツクシマ姫である。子のない婦人がこの明神さんに祈願すると子が授かること、また、周防山口方面から来る舟が広島湾に入る検閲の刻印を打ったことなどよりそれぞれの名ができたといわれる。現在残っ

た。

ている島は「男明神」と呼ばれたもので、「女明神」と呼ばれた小島は国道建設でとり崩された。

(三上 昭荘)